全知全能無知無能

安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
全知全能無知無能

【Ｎコード】
Ｎ１５６３Ｐ

【作者名】
安藤ナツ

【あらすじ】
妹を殺された女と、前を見るのをやめた男、すべてを知る少女。
一人の死の犯人はいったい誰なのか？

例えば、世界を創った存在を知っているとしたら、その人は何者だろうか？
神。創造主。造物主。デミウルゴス。
そんな存在を知りうる存在もまた、それと同格、もしくはそれ以上の存在でなくてはならないのではないだろうか？
もっとも、真実が必ずしも輝かしいものではないように、事実が絶対に正しいものでもないように、正直者に見えてもその手先が何をしているかわからないように、この問題の回答も望んだものとは程遠い所に回答がある。
大江九郎はこの世界を創ったと言う存在を知ってはいるが、絶賛無職のオジサンだ。そして、九郎の二七年間に及ぶ人生の中で、最大の成功がその存在を知っていることだった。
そんな九郎は、味わいもない寂れた公園の、腐りかけたベンチに腰かけたていた。黒いニット帽の位置を調節して、黒いジャンバーのポケットから安煙草を取り出す。それを口に咥えると、百円ライターで火をつける。
「……さん。探偵さん。お話を聴いていますか？」
悠長に煙草を呑む九郎の態度を見かねて、彼の前に立つ女子大生と思われる女が、少し目を鋭くして詰め寄る。夕暮れの茜空に染まる真っ白で柔らかそうなコートと、同じく白い小動物のようなマフラーを首に巻いていて、良いトコの御嬢様と言った風勢だ。怒られたことがないのか、その表情は怒りを表すには程遠く、全然迫力がない。九郎は、子供の頃に飼っていたダルメシアンが産んだ、産まれたての子犬を思い出していた。
「ああ。聞いているさ」
本当は、これっぽっちも話など耳に入っていなかったが、九郎はいい加減に答える。

彼女は、九郎の小遣い稼ぎの依頼人なのだが、別に話を聴く必要もない。依頼内容など、九郎は知る必要がないし、どうせ血生臭い話なのだから聴きたくもないと言うのが本音だ。
いつものように『自称造物主』に会えば、それで解決する物語なのだ。
「それよりも、『探偵さん』は止めてくれ」
「どうしてです？　妹を殺した犯人を見つけてくださるのでしょう？　それだったら『探偵』さんです」
「俺は『情報屋』だ」
別に強い拘りが有るわけではないが、『探偵』と言う業種は九郎の仕事から離れすぎていた。恋と愛くらいの差がある。
「あんたの臨んだ情報を持ってくるのが、俺の仕事だ」本当は仕事なんて立派なものではないが、説明するのも面倒なので九郎はそれっぽい言葉を口にした。
「じゃあ、容疑者を集めて『犯人はお前だ！』ってやらないんですか？」
心の底から意外そうに、女が呟くのを聴いて、九郎は呆れた。こんな頭の中にお花畑が出来上がっている人間が、どうして自分に辿り着けたのか、不思議でしかたがなかった。
「どうやって、俺のことを知ったんだ？」
単刀直入に九郎が訊ねた。あの存在に出会って以降、九郎は人に訊く行為に全く抵抗がなかった。
知らないと言うことは、別に損をしているわけではない。
知っていることは、絶対なアドバンテージとは成り得ない。
「えーっと、樹君って言う男の子です。殺されてしまった妹の友達で、由愛ちゃんって言うかわいい子がいるんですよ。いつも本を読んでいて、メガネがとっても似合うんですよ。髪の毛も滅茶苦茶サラサラしていて、羨ましいなー。あ、それでですね……」
「あー、わかった。あの坊主か」
放って置けば延々喋りそうな女の言葉を無理やり遮って、九郎は

納得する。
「どうせ、葬式の席かなんかで『あなたの隙間を御埋めします』みたいに言い寄られたんだろう？」
一体どこのセールスマンだと、九郎は紫煙を吐き出しながら、ボサボサの髪の毛を右手で混ぜる。
過去三回、大木樹の依頼を受けたことがある九郎だが、樹少年の厄介さは良く知っている。一昔前の漫画の主人公の様に率先して問題に首を突っ込んでは、状況を掻き混ぜるだけ掻き混ぜた後、『じゃあ、後はわかるよね？』と言わんばかりに丸投げにしてしまうのだ。
今回も大凡そう言った経緯だろう。
「そうなんですよ。樹君が、葬式の後、由愛ちゃんと一緒に来て、泣く私に向ってそう言ったんですよ。一週間位ずーっと二人で通ってくれて、私、彼のおかげでこうやって笑えるようになったんですよ」
「そうかい」
何を吹き込んだんだと、九郎は考えるが、すぐに放棄した。あの少年自体が何も考えていないのだから、考えようがそもそもないのだ。
「で、あんたはどうするんだ？」
「どうするって？」
「俺が犯人を見つけたらだよ。警察に突き出す気か？」
九郎の問いに、女が首を傾げる。一足す一の解が四になってしまったような表情で。
「おかしなことを言うんですね」
女は笑った。
「私の手で殺すしかないじゃあないですか」
とても精巧に出来た、ひょっとしたら本物と間違えて警察官が取り押さえに来そうな鉄製のモデルガンのようなものをコートの内側から取り出す女の眼は、一切の光を讃えていなかった。

「ですよねー、殺しちゃいますよねー」
九郎は、取りあえず頷いておいた。

「『わたしは「結果」だけを求めてはいない。「結果」だけを求めていると人は近道をしたがるものだ……。近道した時真実を見失うかもしれない。やる気もしだいに失せていく』」
もうここ数年シャッターが開いたことのない生花店の二階に九郎が上がると、そんなセリフが出迎えてくれた。それは柔らかい、十代も中ごろの少女の声音であった。
丁度、九郎が玄関の扉を開ける瞬間にその言葉は聞こえてきたので、恐らく九郎に向けられた言葉なのだろう。誰が上って来たのかなんて、声の主にしてみれば足音で判別する必要もなくわかるはずだ。
妙に芝居がかった言い方から察するに、恐らく漫画かゲームのセリフなのだろうと、九郎は適当に辺りを付けた。
三和土（と言ってもコンクリートだが）で履き潰れてきたシューズを脱ぎながら、九郎は声の持ち主の姿を見て、取りあえず一安心した。もっとも、彼女がこの部屋から出て行ったことはないので、心配する必要は殆どないのだが。
「《竜神天帝》。今のセリフは何だ？　あの本屋が持ってきた漫画か？」
「そうだよ。その通り、あ！　違った。『ＥＸＡＣＴＬＹ』！」
九郎の情報源、部屋の主、究極にして絶無の能力者、起源にして頂点の造物主、《竜神天帝》は黄金比の唇を吊り上げて、爬虫類のような真ん丸な瞳で笑った。
襖が取り除かれて境目をなくした和室三部屋と、ガスも水道も通っていない台所しかないこの二階住居の中心。その天井に、《竜神天帝》は逆さまに立っていた。真っ白な絹のような髪の毛が床にまで到達していて、九郎はトウモロコシみたいだなと思った。

因みにどうでも良い（事件の証拠が下らない場所で見つかるように、最重要事項でもある可能性も無きにしも非ず）が、彼女は全裸だ。それなりに発育した胸や尻や括れた腰にある臍は、魅力的ではある。が、少なくとも七年前から一ミリも成長していない彼女に欲情する程、九郎は困ってはいない。

と言うより、天上に逆さまに引っ付ける存在はただの脅威だ。Gを筆頭に。

「知らないの？　ジョジョだよ、ジョジョ。ジョジョの奇妙な冒険第五部、黄金の旋風。アバッキオの上司の台詞だよ」

九郎に内心、黒い家庭内害虫と同一視されているのを知っているのか知らないのか、《竜神天帝》は、それが自分の誇りであるかのように語る。

「よっと」掛け声と同時に、《竜神天帝》は天井から降りて、ボロボロで埃塗れの畳に足をつく。「似たようなことを、七部、スティールボールランでジャイロが最後に言っているんだよね。『一番の近道は遠回りだった。遠回りこそが俺の最短の道だった』とね」

部屋の隅にある妙に綺麗な本棚から《竜神天帝》は該当するコミックスを抜き取ると、そのまま床に座り込み始めた。

「結果を求めない。『結果』が『全て』ではないんだよ。『全て』が『結果』なのだから、工程の短縮や、結果やその場の損得ばかりを考えていては駄目なんだ。知っているよね？　九郎」

ペラペラと単行本のページを捲りながら、《竜神天帝》は一連のセリフに自分の解釈を付け加える。

「知るか。大切なのは結果だけだ。あんたは、その結果を知っているから、そんなことを言えるんだよ。違うか？　不死身の化け物さんよ」

それに対して、九郎は悪態をついて言葉を返す。九郎はこの《竜神天帝》の知識で甘い汁を吸っているのだが、決して好意的な目では見ていなかった。

「何だ、知らなかったのか。それはすまなかったね。ああ、最新巻

が待ち遠しい」
「お前が世界を創ったんだろう？　自称全知全能」
見た目通りの少女のように瞳を輝かせる《竜神天帝》に、九郎は皮肉を返す。
「うん？　確かに私は造物主で、全知であり全能であるかもしれない。でも、それは君が言ったことであり、私が知ったことではないよ」
知ったことではない。って言いやがった！　九郎は内心叫びたいのを抑えながら、「なんじゃそりゃあ」と馬鹿にするようなことを取りあえず口にしておいた。
未だに要件を切り出さず……と言うより挨拶すらしていない九郎に気を悪くする風もなく、《竜神天帝》はコミックに目をやりながら、口を動かした。
「そうだね、いい機会だから話しておこうか」
「何をだよ？」
「『私が何なのか』だよ。君は大好きだった殺し屋を廃業して、私を情報元にして商売をやっているみたいだし、もう付き合いも随分長くなって来たし。もうそろそろ、私について話しても良い頃かもしれないね。いや、今しかもう話す機会はないとさえ言える。聴くだろう？」
「いらねーよ。お前は俺に情報だけくれれば良いんだよ」。
「まず、私は知っての通りに全知全能だね。正確に言えば、私はあくまで造物主であり、君であり、咲良ちゃんであり、美咲ちゃんであり、樹君であり、あの本屋であり、あの魔女であり、あの事務員であり、このコミックであり、この部屋であり、この世界であり、全てであり、無であり、傍観者だよ。私にとって、人間が認識する個とは、細胞の一つ一つを区別するような、繊細で酷く面倒な作業なんだ。この世界は私だし、私は世界そのもの。だから、全てを知ってはいるけど、面倒な所はあまり見ないようにしているんだよ」
用意してあったのか、慣れた様子で《竜神天帝》はすらすらとそ

れだけを詰まらずに言って見せる。
九郎は、ただただ、意味がわからないと思った。
「まあ、この世界を創っちゃた張本人ちゃんだからね。それくらいのことは前提さ」
「聴けよ。いつもみたいに何も言わずに情報をよこせ」
「簡単に言えば、私は自分自身をドミノにして並べて、押したの」
「あー、どうせ、いつもみたいに茶封筒に入っているんだろ？　勝手に探させてもらうぜ」
自分勝手が二人、好き勝手に話を始める。
もっとも、九郎はどれだけ探しても見つからないことは、十分理解している。あくまで聴いていないと言うポーズだ。
それにしても、《竜神天帝》がドミノを知っているとは意外だった。いや、自称全知なのだから不思議はないのだろうが、どうにも引っかかる比喩であった。
「並べて並べって、チョンと押す。天地創造はこの程度のことだよ。君たち人間が目に宝石の入った髑髏のお土産を作るよりも簡単な作業だよ」
わけのわからないことを。
九郎は、《竜神天帝》の話に心中で突っ込みを入れる。部屋中に誰かの差し入れと思われる貴重品やら粗大ゴミが積まれており、九郎は置いてあった高価そうなネックレスをジャンバーのポケットにしまった。
他にも、やたら豪奢な作りの洋服や、使い道のわからない伊勢海老と掃除機を組み合わせたような緑色の機会が転がっていたりする。一体、何処の誰がこんなモノを持ってくるのだろうか？　少なくとも、漫画本は隣町の本屋の店主なのだろうが。
「そう、私はすべてのドミノの牌を並べてしまったわけ。こうなるように、世界がこうであるように並べちゃったの。並べた張本人であるから、ぜーんぶ知ってる。九郎の過去も今も未来も。同時に九郎じゃあないから、九郎の知らない過去も今も未来も知っている。

知ってたよね？　九郎」
「その話は、前『ドリンクバーのジュース混ぜ混ぜ』と言う例えで聞いた」
「そうだったけ？　でも、それを聴く前の九郎は知らなかったわけでしょ？　だったら、その時の九郎として聴いてくれればいいよ」
「意味がわからん」
グラマーな『魔女』が置いて行ったと思われる、悪趣味な絵画を蹴飛ばして、九郎は金目のものを探す。時代を感じさせるアステカの石仮面が壁にかけてあったが、それは無視しておいた。
「わからないのか、君は本当に馬鹿だね」
「俺が『わからない』ことは『知らなかった』のか？」
揚足を取りながら、九郎は押入れを開けて、中身を物色する。前回来た時は、ここから沢山の子鬼が出てきて随分焦ったが、今回はそのようなことはなかった。
「さて、ジョジョは満喫できたね。次は、うしおととらでも読もうかな。あれは最後の五巻はまとめて読む必要があると思うけど、九郎はどう思う？」
本棚の下段から一気に四・五冊のコミックスを引き抜いて、《竜神天帝》はにんまりと笑う。そのまま床に転がって、ページを開く。綺麗な白髪に大量の埃が付着したが、それを気にする様子もない。
「『ちくしょう……だから弱っちくてキレエなんだよ……人間は……』このセリフが私は一番好きだね。秋葉流ととらの船上での激闘。予想できなかったその結末。とらの表情が見えない演出が何ともいえない」
「お前よ、全知全能の癖に漫画に感化され過ぎだろう。つーか、世界を『こう』創った時点で、漫画の結末は知ってんだろ？」
「知っていても楽しめるのが『名作』でしょう？　いっつも、犬神家は最後まで見ちゃうんだよね。っていうか、犯人を覚えていないんだよ」
「俺にはわからんね」

押入れに上半身を突っ込むと、九郎は小さな金庫を見つける。灰色で掌サイズのそれは、中小企業の事務員が小銭入れに使いそうなデザインで、持ってきた人間は直ぐに検討がついた。
「九郎は本当に知らないことばかりね。これから君の名前を呼ぶたびに『無知な』と付けることにしたよ」
「お、この指輪は高く売れそうだな」
南京錠をピッキングして蓋を開けると、そこには四つのカラフルな宝石が付いた指輪が入っていた。リングにはそれぞれタグが付けられていて、青い宝石には『始祖の指輪。水のルビー』と書いてある。
青いルビーはサファイアだろうと九郎は思った。
「でも、あれだよ。実は私、この世界を創るのに失敗しているからね、わからないことが多いのも事実だね」
はたしてこれを会話と呼ぶべきなのか、二人はそれぞれ自分の手元にあるもの熱心に眺めながら勝手にしゃべり続ける。
「ドミノを並べている最中に、何処かを蹴飛ばして勝手にドミノが走り始めちゃった感じだよ。西に東に大忙し。あくまで原型は留めているけど、細部が滅茶苦茶だよ。能力も徐々に人間に奪われているし」
てへへ。と、取ってつけたように笑う《竜神天帝》。見た目は少女なだけに、あざとくてもそれなりに可愛い。
「だから詳しいことを、私に問われても困るんだよね。特に、人間なんて創る気はなかったんだから。君達は本当に面倒だよ」
「おい、《竜神天帝》。他に金目の物はないのか？」
「私は金銭に興味がないからねー、好きな物を持っていきなよ。でも、無知な九郎がこないだ珍しく『対価』として渡してくれた『腕時計』は持ち帰ってくれないかい？」
そういって、《竜神天帝》は顎で座布団の上の腕時計を指す。女物と思われるその腕時計は絶対に九郎の物ではないように思えた。
「ああ？　俺、こんなの忘れたのか？」

手に取って見るが、どうにも覚えがない。
「三週間ほど前だね。君は酷く泥酔していたから。覚えてないのかもしれない」
暫く腕を組んで考えた後、九郎はその腕時計を持ち帰ることにした。女物で自分に相応しいとは思わないが、適当な女にプレゼントでもすれば良いかと考えた。
「私は全体像を想像しながらドミノを並べていたのに、君達人間はそれぞれ一枚一枚のドミノを個別に切って取って意味を求めるでしょう？　面倒この上ないよ。偶然とはいえ、面倒なものが出来たものだよ」
ごろごろと傷ついた畳の上を転がりながら、やる気なさそうに説明を続ける《竜神天帝》。
日に当たっていない白い肌が、艶めかしい色気を放ってはいるが、埃取りと化した髪の毛のマイナス面が強すぎて、扇情的な掃除道具と言う未知のジャンルを開拓し始めていた。もう、太陽は完全に沈んだのだか、寒くないのだろうか。
「本当に、人間のそう言う所がキレエなんだよ。無知な九郎。私は何でも知っているし、何でもできるんだ。それでも、それは何も知らないし、何もできないと言うことなんだよ」
「知らないわけがないだろうが、いっつも、俺が欲しい情報を教えてくれるじゃあないか、タダで」
最後の『タダ』に重きを置いて、九郎が話に相槌を打つ。
「そうだそうだ、早く渡してくれよ、今回の情報！　探すのにも飽きが来たぜ？」
「貰う人の態度じゃあないんじゃあないの、それ」九郎の物言いに呆れる《竜神天帝》。「大体、私はまだ何も君から聴いていないよ」
「知っているんだろう？　俺が何を貰いに来たか」
「当然知っていると答えておくよ？　御門咲良ちゃんが二十二日前に、学校帰りに乱暴されて死んだんでしょう？　その咲良ちゃんのお姉ちゃん、御門美咲ちゃんに頼まれて、無知な九郎は、犯人を捜

してあげると言う条件と引き換えに、大学生の美咲ちゃんがファミレスでバイトして貯めた、本当は車校と車代の為に貯めた三十万円を受け取ったんでしょ？　そんなことは誰でも知っているよ。知らない人間を探すのが面倒なくらいだよ。私が訊きたいのは『どうして無知な九郎は私に一切の説明をしないのか』って所だよ」
「だから、知っているんだろう？」
会話になっているようでいて、見当外れな回答をする《竜神天帝》に、九郎は苛立ちを隠さずに答える。
いつもだったら、『ん、どーぞ』と軽い気持ちで望んだ情報が書かれた便箋を封筒に入れてよこしてくれるのだが、今日は中々に出し渋る。
機嫌でも悪いのだろうか？
「言ったよね？　結果だけを求めちゃあ駄目だって。ああ、聴いたところで君は何も知らないんだったね。まあいいや。今日の私は気分が悪いからね。話ぐらい聴いて行って頂戴な」
「世界を創った存在なのに餓鬼みたいなことを言うなよ」
本当に機嫌が悪いことをカミングアウトされ、口を開けて呆れるしかない九郎。見た目は少女だが、仮にも造物主としての誇りはないのか？
「だーかーらー、世界を創るなんて、別に大した事じゃあないよ」
失敗したお前が言うのか。と、九郎は思ったが、『失敗』する程度の存在であると思えば、機嫌が悪くなるのも頷ける。本当に、目の前の露出狂が造物主だと考えると、虚しくなってくる。いや、これも『全能』故に『無能』の要素を持っていると言うことなのかだろうか？　そんな矛盾を内包していると言うのだろうか？
「考えても仕方がないな」
溜め息を吐いた後、仕方なく九郎は「で、他に話があるのか？」《竜神天帝》の話を聴くことにした。女の一人語り程つまらないものはないが、さっさと聴くだけ聴いて、情報を貰って帰った方が利口だと気が付いたようだ。

台所に立って、使っていない冷蔵庫の中をあさりながら、九郎は《竜神天帝》の言葉を待った。冷蔵庫には、大量のＡ４サイズ印刷紙が入っていた。
「そう言うと知っていたよ。私はね」
本棚の四段目に右足の踵を乗せた状態で、《竜神天帝》はしたり顔を造る。
「でも、私はもう無知な九郎に伝えたいことはすべて言ったつもりだよ？」
「漫画の話と、お前の確かめようのない天地創造の話しか聴いていないぞ」
重要そうな話は一つもなかったと、九郎は首を振る。中学生が授業中のテロに対策をするくらい無駄な話としか思っていなかった。
「だから、君は無知な九郎なんだよ。重要なことを重要だと思わない。必要以上に経緯を短縮して、結果だけを求める。まるで、そうであることが優秀であるように錯覚している。蜘蛛の巣を見るような議論をしているんだよ、無知な九郎は」
コミックスを本棚に片づけながら、《竜神天帝》は困ったように笑う。
「私と言うわかり易い、絶対な『結果』を求めて、自分と言う『過程』を無視しているんだよ。無知な九郎。君は、結果だけを求めすぎている」
一旦言葉を切って、《竜神天帝》が立ち上がる。
「珍しく、大物ぶって君に忠告しちゃったね。でも、私の言葉の意味はしっかり考えた方が良いよ。質問があるのなら、ここで訊ねた方が良いよ」
まるで、こうやって話すのが最後だと言わんばかりに、《竜神天帝》はゆらゆらと台所で物色をする九郎の背中に近づくと、倒れ込むように抱き着いた。
初めての《竜神天帝》の行動に、流石の九郎もぞんざいな態度を取れずに困り果てる。埃まみれとはいえ、見た目が少女だと言うの

が罪悪感を心に宿らせる。そんなものがあったのかと、九郎は自嘲した。
「質問ねえ」
言われて、九郎はしばらく使っていなかった頭脳を回転させる。《竜神天帝》がこんな忠告を言って来たのは初めてだし、珍しく必至な様子だ。これは本当に何かあるのかもしれないとは思い始めていた。
そして、九郎は、
「遠慮しとく。結果だけを求めちゃあ駄目なんだろう？」
唇を吊り上げて笑った。
《竜神天帝》はその言葉に、「そうか」とだけ答えると、九郎の背中からあっさり手を放した。
弱々しい抱擁から解放された九郎がその顔を覗き込むと、妙に寂しそうな《竜神天帝》の瞳と視線が合った。
「さっきの腕時計を見せれば解決するよ」
「この、女物の時計が？」
ニット帽の中にしまった時計を取り出すと、九郎は掌の上でそれをクルクルと弄る。どう見ても、これは安っぽい時計だ。犯人の持ち物だとも思えないし、仮にそうだったとしても、美咲に見せるだけで解決するわけがない。
怪訝そうに顔を歪める九郎。
「見せるだけで良いのか？」
「私が信じられないのかい？　安心して、きっと解決するよ」
九郎の不安を掻き消すような笑顔で、《竜神天帝》はこう付け加えた。
「ただし、無知な九郎が、その時計のことを真摯に考えれば話は別だよ。事件は永久に解決されないから、十分気を付けてよね」
美咲がバイトするファミレスの喫煙席に座ると、九郎はドリンク

バーを注文した。注文を取りに来たのは美咲ではなく、メガネをかけた大学生風の男だったが、『親戚だけど、美咲ちゃんいる？』と聞いたら、『後、一時間でシフトが終わりますよ』と教えてくれた。
「じゃあ、このアイスクリーム追加で」
「ありがとうございます。美咲先輩には伝えておきますね」
「ああ、探偵の人って言えばわかると思うよ」
人懐こい感じのバイトに要件を伝えると、九郎は席を立ってブラックコーヒーを取りに行く。途中、銀色の髪と緋色の瞳を持つ鬼の様な青年と目が合って殺されるかと思ったり、その連れの女子高生にオレンジジュースを事故ながらかけられたり、見ず知らずの少女に『パパ』とか言われて一悶着あったり、痴話喧嘩中のカップルに意見を求められて修羅場に放りこまれたりと、コーヒー一杯取って来るのに、やたら時間がかかってしまった。もう時間は深夜に差し掛かっているのだが、どうしてこんなにも客層が厚いのだろうか？
既にアイスクリームが置かれている机に戻ると、九郎は三人掛けの長椅子に両手足を広げて座る。そのままの姿勢でコーヒーを一口分啜り、ポケットから最後の一本を取り出して咥える。
「しっかし、結果だけを求めるなって言われてもな」
器用に煙草を口にしたまま、九郎は一人呟く。
《竜神天帝》のあのお喋りは一体、何を意味しているのか。ファミレスまで来る道中に幾度となく自分に問うた言葉であった。
今、九郎が置かれた状況で言う結果とは、一体何を指すのだろうか？
「まあ、あの美咲って女に『時計』を渡して、『犯人』を教えることだよな。んで、三十万貰う」
間違いない。と、九郎は念を押す。ボロアパートの家賃も溜まっているし、タバコも買わないといけない。『三十万』と言う金銭が、九郎の目標である。しかし、『金を求めるな』なんてことを言う《竜神天帝》ではないだろうから、言いたいことはもっと違う所にあるはずである。

「あー、他に何を言っていた？」
例えば、『全てが結果』。
例えば、『一番の近道は遠回りだった。遠回りこそが俺の最短の道だった』。
例えば、『蜘蛛の巣を見るような議論をしているんだよ』
彼女はそんなことを言っていたが、どれもこれも、重要な言葉には聞こえてこない。と言うか、全部漫画やゲームのセリフだと気が付いた。
「やってらんねーよ」
真剣に考えているのが馬鹿みたいだと、九郎は持ち帰った時計を取り出すと、机の上に転がす。
「ん？」その時計を見て、九郎はふと気が付く。「そう言えば、この時計も、結果と言えば結果だな」
犯人を特定する証拠を貰いに行って、この時計が貰えたわけだから、間違いなく『結果』である。一人頷きながら、九郎はこの時計のいわれを思い出す。女物のその時計は、《竜神天帝》が嘘を吐いていなければ九郎が『対価』として渡したものだと言っていたはずだ。
しかし見れば見る程、自分の持ち物だとは思えない。ためしに手首に巻いてみても、細すぎてはち切れてしまわないかと疑問に思ってしまうほど余裕がない。
本当にこれは自分の物なのだろうか？　と疑いの目を向けると同時に、九郎は《竜神天帝》の言葉を必死に思い返す。
腕を組んで唸ること数分。
「そう言えば、何か言ってたな。三週間くらい前の話だとかどうとか」
思い出せたのはそれだけだった。
「三週間前？　三週間前って俺、何してた？」
「……私の妹が死んだのが、三週間ほど前のことです」
そして、九郎の視界に見えるのは、黒ずんだ鉄の塊に開いた穴と

美咲の冷たい瞳だった。
「丁度、私が誕生日プレゼントにその時計を渡した次の日に、咲良は殺されました」
「その時計って……この時計？」
九郎が間抜けに口をぽかんと開けながら訊ねると、美咲は引き金を一度引いた。
乾いた音が夜中のファミレスに響いた。すぐさま、血飛沫と悲鳴が木霊する。右腕を押さえながら痛みを訴える九郎の叫びよりも、それを見て叫ぶ婦人方の声の方が激しかった。
「あなたね。あなたが、咲良を殺したのね？　決まっているわ」
銃声、悲鳴。
「だって、その時計を持ってるんだもん」
銃声、悲鳴。
「犯人が持ち去った、私のプレゼントを」
銃声。銃声。
騒然とするファミレスで、六発目の銃弾は放たれようとした瞬間。
『あーあ。言ったのに』《竜神天帝》の声が九郎の頭に響いた。
「てめー！　何してやがる！」
薄れゆく景色の中で、九郎は、先ほど睨めつけてきた銀髪の青年が吼えながら、美咲に突撃していくのを見た。銃に対する恐れなどは一切なさそうで、勇敢そのものの表情で笑っているようにすら見えた。
『九郎、これが君の求めた結果だよ』
銀髪の青年が躊躇なく美咲の顔面に拳を叩き込み、華奢な身体が派手に宙を舞って吹き飛ぶ。思い切った一撃に、騒がしい店内が更に沸き、悲鳴とも歓声とも付かない声で埋め尽くされる。

「人殺し女ぁ！　言い訳があるなら、今の内にツイッターしとけよ！」
「世界君！　もう気絶しています、その人はもういいですから！　この人の手当てを！」
興奮した様子で美咲に近づく銀髪の青年に、付き添いの女子高生がツッコミを入れる。女子高生は九郎の身体に開けられた穴を、机の上のナプキンで抑える。
が、彼女の二本の細腕では、全身五か所に開けられた銃創は塞ぎきれない。銀髪の青年が加勢したとしても、結果は変わらないだろう。
自分の死が迫る中、九郎が感じていたのは死でも恐れでもなく、《竜神天帝》の声だけだった。

『君は、美咲に時計を渡す。結局そこしか考えていなかったんだ。その美咲がどんな人物なのかも考えずに、その時計が誰のものかも考えずに、私が嘘を吐くなんて微塵も考えもせず、無知な九郎はただただ、結果しか見ていなかった』

「……が、ふ、あああ」
造物主が、全知全能がしょぼい嘘を吐くなよ。そうぼやく九郎ではあったが、唇も舌も肺も思い通りに動かず、苦情は誰にも届かない。
「喋っちゃあ駄目です。すぐに救急車が来ますからね」
「写真取ってんじゃあねーよ！　ああ？　傷口抑えるの手伝いやがれ！」
見ず知らずのカップルが、声を掛け合い、両腕とまだ新しいと思われるコートを血に染めながら必死に手当てをするが、所詮は素人。血は止まらず、どんどんと九郎の身体の外へと溢れ出していく。
九郎の視界は霞んでいく景色を映し、耳は遠くなっていく周囲の声をかろうじて拾う。

そんな中で、《竜神天帝》の声だけは、しっかりと心に染み渡たる。

『私はね、ほんとに人間をキレエに思っているんだ。
必要のない、本来は存在しえなかった存在は、本当に腹立たしい。
思い通りに動かない、本当に嫌いな存在だ。
今の君と同じ、なるようにならないと言う形の最悪さ』

なるようにならない最悪。
なるほど。九郎は徐々に冷たくなっていく自分の身体を感じながら、面白い事を言うと声にならない声で呟く。
いつだって、九郎の人生をツマラナイものに変えていたのは予定調和の日常ではなく、伏線もない唐突な異変だった。
突然、親が宗教に嵌った。親友だと思っていた人間に土壇場で裏切られた。好きな人は交通事故に遭ってあっけなく死んだ。裏の社会で名を上げ始めた頃に、《竜神天帝》と出会ってしまった。

『でも、人間は自分から変えることのできる存在だ。いっそ、私と同じ存在だと認めても良いくらいに、人間は変化できる生物だ。君達が我武者羅に突き進む様は見ていて楽しいし、悩みながら前進する姿は心躍る。
その姿は本当に綺麗だと思うよ。
でも、九郎はそれを放棄してしまったからね』

淡々と、《竜神天帝》は死刑宣告をする裁判官の様に、台詞の最後をこう締めた。

『もう、私にとって君は価値がないよ』

《竜神天帝》の声が消えると同時、九郎の世界が全てを失った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1563p/

全知全能無知無能

2010年11月26日19時40分発行